∞∞

ニュースレター「がん１１０番」第12号　2006.1.1

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

∞∞

明けましておめでとうございます。

12月中旬から記録的な大雪が降るなど､暖冬予想は外れてしまいましたが,新しい年を迎え、気持ちを新たにして、がん患者さんとご家族の支援の更なる拡充に努めて参りたいと考えております。会員の皆様には、２月に予定されているシンポジウムや当会の各種事業にご参加いただきたいと思います。今年も宜しくお願い申し上げます。

ニュースレター第12号をお送りします。

今回は、12月号と新年号の合併号として，盛り沢山の情報を提供させていただいております。患者さんとご家族,そして会の目的に賛同していただき,ご支援いただいている会員の皆さまに，少しでもお役に立てれば幸甚です。

今後とも皆様とともにがん患者さんとご家族を支援する事業に取り組んで参りますので，ご協力とご支援を宜しくお願い申し上げます。

●理事長あいさつ　「新年を迎えるにあたって」

****

新年を迎えるにあたり、NPO 法人がん患者支援ネットワークひろしまの理事長として一言ご挨拶させていただきます。

私は放射線治療の専門医としてがん患者さんたちと向き合う中で、医療者側と患者さん側とのギャップというものを見つめてきたつもりです。

専門的な知識や情報は当然のこととしても、治療の目標やその結果の評価についても、両者の間には時に大きなギャップが存在します。

がん患者さんの思いが医療者に届かない、届いても思いはかなわないという事例をいくつも体験しました。不幸にして再発や転移が起こってしまった場合は、特に問題が複雑です。

がんの治療は大病院を中心に行われていますので、大病院の持つ問題点に患者さんが悩まされるという図式が見えてきます。
日本の医療では、医師が多くの患者さんを短時間に診察しなければ、病院の経営は成り立たないシステムです。
良心的な医療者の犠牲的精神と体力に頼っている日常診療の中で、再発や転移が起こってしまった患者さんの複雑な問題に的確に対応するには、さらなる労力が必要です。

このようながん医療の現状を理解した上で、がん患者さんのニーズに答える活動が求められていると感じた同志が集まり、平成 16 年にがん患者支援ネットワークひろしまが誕生しました。
がん医療にはいくつもの「すき間」があり、その「すき間」でがん患者さんとご家族が困っているのであれば、「すき間」を埋めるコーディネータとしての活動が役に立つはずだというような発想でした。

少しずつではありますが、セカンドオピニオンの開設病院が増えたり、市民向けのがんに関する講演会が増えたりと、医療者側やお役所側も患者さん側のニーズを意識する傾向がはっきりしつつあります。
国の「がん拠点病院制度」の見直しの中でも、がんに関する情報提供と相談窓口の設置は、必須の機能として重要視されています。

私たちは、このような変化を歓迎したいと思います。
がん医療の「すき間」を埋める活動を、医療者側と患者さん側とが、手を携えながら推進していきたいと思っています。

平成 18 年も、会員の皆様をはじめ、関係の皆様方のご理解とご支援を、なにとぞ宜しくお願いいたします。

理事長　廣川　裕

●シリーズがん療養生活の基礎知識　ＡtoＺ

****

在宅医のつぶやき⑫

今回は「ひとりの在宅医の思い」を紹介したいと思います。

私は在宅医として、一般の患者さんに対しては、元気になって長生きしていただくための治療を行う一方で、治癒する見込みが少ない患者さんに対しては、緩和のための治療を行っています。

両者は一見異なる行為のように思われますが、患者さんが「自分に残された時をより良く過ごしていただくための治療」という点では一致していると考えています。

昨年も多くの患者さんを在宅で拝見し、そして何人かの患者さんを看取らせていただきました。

振り返ってみますと、ほとんどの患者さんやご家族には、在宅で良い時を過ごしていただけたのではないかと考えていますが、中には色々な要因によって、そうではなかった方もおられました。

在宅緩和ケアは、まだまだ発展途上の領域であり、これから整備していかなければならない問題が沢山あります。

今年は、少しでも多くの患者さんが、在宅でより良い時を過ごしていただけるよう、当会の中で努力していく所存です。

今年も引き続き、会員の皆さまと共にがん医療を取り巻く諸問題に取組んで参りたいと思いますので，ご支援とご協力をお願いします。

メールやお手紙で、お気軽にご意見ご感想をいただければ幸いです。

理事　田村裕幸

●Dr.津谷の「がん患者の在宅療養は任せんさい」

****

明けましておめでとうございます。

今回は､新しい年を迎える時にふさわしい話題として、「がん治療進展のハイライト」と題し、がん治療の最前線の情報を紹介します。

NPO 法人となり，あれよあれよという間に１年が過ぎてしまいました。

年齢を重ねるほど，１年をより短く感じるのは私だけでしょうか？

人間の生きている年齢分の一つとして１年を感じているとすれば，昨年の１年は人生の 50 分の１にしかすぎないのではないかと。

しかし，人間はその反面，量ではなく絶対的な人生の質をあげているのではないでしょうか。

年頭に当たり、昨年の「がん治療のハイライト」をまとめてみましょう。これは、米国癌治療学会（ASCO）が、癌の臨床研究に関する年次報告を，治療の躍進としてまとめ、発表したものです。

ⅰ）乳癌の治療薬，ハーセプチン（トラスツズマブ）：

乳癌患者の最大 30%が，「ヒト上皮成長因子受容体２たんぱく」の過剰産生が認められる悪性腫瘍であり，このような癌は、治療に対する抵抗性が高いことが知られています。

しかし，近年の研究から，ハーセプチンを投与すれば、この高リスク患者の癌再発率が半減することが判りました。

ⅱ）肺癌の外科手術施行後の化学療法により生存率上昇：

術後の補助的化学療法によって，初期段階の非小細胞肺癌の再発リスクを大幅に低下させることが判りました。

ⅲ）Avastin アバスチンが肺癌及び結腸癌の進行を抑制　：

Avastin（アバスチン　日本国内未承認）とは，腫瘍への血液供給を遮断する「血管新生阻害薬」です。

治療が困難な進行結腸癌及び非小細胞肺癌の生存期間を延長させるのに有効であることが判りました。

ⅳ）術前の化学療法が胃癌の生存率を上昇：

最新の研究結果から，術前に化学療法を併用すると，胃癌患者の５年生存率が有意に上昇することが判りました。

ⅴ）新たなワクチン２種に子宮頸癌の予防効果：

先進国では子宮頸癌の検診手段としてパパニコロー染色標本が用いられ，ほぼ成果を上げていますが，発展途上国では未だ数千例の女性が死に至っています。

新しい２種のワクチンが，大半の子宮頸癌原因であると考えられているヒトパピローマウイルスへの感染を予防すると思われます。

がん治療の進歩は決して早くはないですが，着実に進歩しています。

ここで紹介した躍進的治療は，特異的な癌や，特異的な遺伝子または免疫学的特徴をもつ患者さんを治療の対象とする「(分子) 標的」療法に分類されます。

すなわちこれからの治療は「個別化」とでも言うべき流れになって行くと思われます。

患者さんに個性があるのと同じように、がんにも個性があります。

そこで、その個性に着目し、それぞれの患者さんに合わせた治療を実施するような方向に向かっています。

2006 年が希望の年になるよう祈りつつ，今年は私の 51 分の 1 の人生がスタートします。今年も宜しくお願いいたします。

副理事長　津谷隆史

●「がん患者さんのためのＱ＆Ａ」

****

今回は「痛み止めの使い方」です。

問）痛みがないときにも痛み止めを飲まないといけないのですか？

答）がんの痛みでは、通常、痛みの原因となる病態が残っていることが多くあります。薬が切れたときに痛みが出るのはそのためです。そういった痛みの場合には、身体の中に常に薬が効いている状態を保つために、痛みが出る前に定期的に痛み止めを飲む必要があります。

また、痛み止めにはいろんな種類のものがあり、飲んですぐ効くものばかりではありません。がんの痛みに通常用いられるものは、長く効くような仕組みにしてあり、そのため飲んでもすぐには効いてきません。痛みが出てから飲むのでは遅いのです。

逆に、速効性で作用時間の短いものは、痛みが出たときの頓服として用いるのに適しています。

薬の特徴を十分に理解して、正しく用いてください。

さて、今年からは、会員の皆さまからのご質問を中心に回答していきたいと思います。痛みの緩和などを中心に質問を募集します。お気軽に質問してください。

理事　藤本真弓

●「がん患者支援スタッフ養成研修を終えて」

****

12 月 11 日、スタッフ養成研修（7 日間、計 28 時間)を無事終了することができ、8 名の方が修了証書を手にされました。

今回は､カウンセラーやホスピスボランティアの方々が参加され、「がん医

療の実際」「がん患者さん・ご家族の心理」「緩和ケア」「在宅医療・看護」「魂のケア」等など、ご専門の講師の皆さまの熱心なご指導をいただくことができました。

研修受講者の皆さんは大変魅力のある方々で，当会の仲間に加わっていただき、心強く、嬉しく思っています。

2006 年、スタッフ一同が皆様のニーズに少しでもお応えし、共に歩むことができたらと願っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

理事　中原秀子

研修を受けられた藤田さんから、研修のご感想を頂戴しましたので，ご紹介します。

残暑の 9 月から雪の 12 月まで，研修はあっという間に終わりました。

終わった今，もっともっと学びたいと思う気持ちが増しています。

それは，研修の中で，素晴らしいドクターや実践者や素晴らしい仲間に出会えたからだと思います。

研修の講義は，難しいがん医療の内容を，噛み砕いて話してくださいましたので，一つひとつ胸にストンと落ちていきました。

それと共に，すべての講師から、時に涙しながら，「人として，どう寄り添えば良いのか」という相談ボランティアとしての大事な原点を、研修を通して学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

今後，この NPO 法人の電話相談等でボランティアとしてお手伝いさせていただきたいと思っています。

そして，講師の皆さまから学ばせていただいた知識と経験を生かし、患者様やご家族の支援者の一人として時を共有した時に，その人の痛みの幾ばくかを感じることのできる心が持てる私でいたいと思います。

藤田ミキ子

●がん電話相談「がん110番」

****

皆さまのご支援をいただき、昨年 12 月 4 日に開催しました「第５回がん１１０番（がん電話相談）」も、多くの皆さまからのご相談に応じることができました。

電話を使っての相談ということで、掛けてきてくださった方々のご要望に応えることができるかと心配しておりましたが、相談員が電話の受付をした上で医師に繋げる事で、治療内容などにおける不安や質問に対して、素早く対応して医師から直接答えが聞けることが好評だったようです。

一昨年の「第１回がん１１０番」では、患者さんのさまざまな不安についてのお話がほとんどでしたが、最近の傾向として、具体的な治療方法の選択や医療機関の情報提供など、相談される方々の知識や情報の多さと、より詳細な情報への要望を感じています。

また、ご自身の病気や病状をよく理解された上で相談される方も多くなり、インターネットによる情報収集や「市民のためのがん講座」や様々な団体が開催する講演会など、知識を深める場所や機会が増えてきていることが理由の一つであるように思います。

これまでの「がん１１０番」でお受けしたご相談の集計から見えてくることをご報告いたします。

ご本人からの電話が７０％、ご家族ご親戚などからが３０％ありました。

広島市内と市外では半々でしたが、県外からのご相談も数件ありました。

治療面では、今後の治療についてが２５％、抗がん剤についてが２１％、治療や生活面など不安に対するご相談が５０％ありました。

このままの治療でいいのだろうか？他の治療はありませんか？もっと他に病院はありませんか？という切実なご相談も多くありました。

「がん１１０番」の開設時には、医師数名と受付スタッフが、朝 10 時から午後２時まで待機し対応しております。

ご相談内容をお聞きして、できるだけ皆様のご要望にあった情報が提供できればと思っております。

今後もスタッフ一同、多くの皆さまのご相談に応じることができるように研鑽を積んで参りたいと思います。

次回は3月5日（日）を予定しております。皆さまからのご相談電話をお待ちしております。

2006年も、皆さまにとりまして良い年でありますようにお祈りいたしております。

副理事長　佐々木佐久子

●会員からの投稿

****

今回も、千葉市在住の会員M.Nさんから投稿がありましたので，ご紹介させていただきます。

「千葉からこんにちは」

「これはがんですね。」シャーカステンに掛かった数枚の画像を見ながら、担当医から肺がんを宣告されました。平成16年3月のことです。

その時、きっと誰もが思うように「なぜ、選りによって私が？きっと何かの間違いでは？」と、私も思いました。その後、気管支鏡検査も受けましたが、細胞まで届かず、がんと確定させることはできませんでした。

医師の説明では「初期だから手術をすれば大丈夫でしょう。」ということでしたが、今まで病気ひとつしたことがない私にとって、手術など、とてもすぐ決められるはずもありません。

１か所の病院の診断だけではとても不安なため、セカンドオピニオンとして、知人から紹介された広川裕先生（当時順天堂大学医学部）を訪ねることにしました。

病院から借りて来た画像をもとに、先生には丁寧に相談に乗っていただき、

適切なアドバイスを得て手術という結論に達しました。その後、迷うことなく手術を受けることができました。

手術時に当初の予想に反し、リンパ節への遠隔転移が分かり、術後は念のために放射線治療と抗がん剤の治療を受けました。

その後順調に推移しているかと思われましたが、６か月後左右の肺に点在して再発が判明しました。がんという病名の重さをようやく乗り越えて、少しずつ心の安定を得られるようになってきた時だっただけに、大きなショックでした。

それから間もなく化学療法が始まりました。
現在、効く薬（抗がん剤）を見つけるために、１か月に１回の入退院を繰り返しながら治療を続けています。

郷里の広島から送られて来る「ニュースレター」を見ながら、私と同じように頑張っている多くの方々を支えに、元気づけられ勇気をもらっています。

千葉市　M. N

●理事からの年頭挨拶

****

○　ＮＨＫが昨年 12 月から取り組んでいる『がんサポートキャンペーン』の一環として、ＮＨＫスペシャル・日本のがん医療を問う『最期までよりよく生きるために（仮）』という番組（1 月 8 日 21 時 15 分～22 時 30 分）で広島県の「緩和医療の現状と課題」が紹介されます。
広島県緩和ケア支援室の阿部さん、ボランティア活動の部分で石口さん、訪問看護で広島県看護協会訪問看護ステーション「そよかぜ」の松井さんが出演されます。

患者や家族の方々が、切れ目・隙間のない適切な医療やサポートを受けながら最期まで、その人らしい日々が送れるような道筋を考えるよい機会かと思います。

是非ご覧になって、広島県での取組みや課題を一緒に考えましょう。
では、皆様、今年も宜しくお願いします。

理事　名越静香

○　「がん家系に生まれて」
どうやら私の家系はがんのDNAをもっているようである。
まず私は４年前に上咽喉がんを患った。耳の鼓膜に圧迫感がある、耳の聞こえが悪くなるなどの兆候あったものの、それががんの前兆とは気づかず、周期的に襲ってくる激しい偏頭痛と激しい鼻血が出て、腫瘍の検査をおこなった結果、がんと診断されて広大病院で入院治療を行うことになったのである。
最初は、生きることよりも、とにかく痛みを緩和して欲しく、先生にも命よりも痛みの緩和する治療をお願いしたのを今でも鮮明に覚えている。
しかし、抗がん剤が効いたのと、広川先生の放射線治療のお陰で４年経った今も再発の気配もなく、会社勤めの傍ら「がん患者支援ネットワークひろしま」のお手伝いをさせていただいている。

私に遅れること１年、３年前に姉が卵巣がんで入院した。
姉は２年前から下腹部に違和感を覚え、7～8の病院で診察を受けるもがんが発見されず、がんと診断されたときは、卵巣がんはすでに破裂して癌性腹膜炎を起こしていた。
もう腹水がたまる状態であるという情報が届いたので、これは長く持たぬと思い、体調の悪い家内も伴って、一家で九州まで見舞いに出向いた。
姉はひどく感激していたのを今でも鮮明に覚えている。

その後、奇跡的に回復し、普通の生活を送っていたが、昨年の３月頃から黄疸を発症するなど病状は激しく悪化した。
その中で四国札所参りを強行し、満願となったお札を高野山に納めた後、入院生活に入った。
その間、私は広川先生にアドバイスを受けながら、ただひたすらに「痛みを我慢しなくていいよ。」といい続けた。

最後の見舞いは彼女が亡くなる一週間前であった。
お見舞いに行ったとき、彼女はひたすら「ありがとう。」を繰り返していた。そしてお札を納めて４ヵ月後の７月に旅立って行った。
我が姉ながら、死が近いことが分かっていて、こんな態度が取れるのか、こんな人はもっと長生きすべきなのにと、本当にやるせない気持ちにさせられた。

次は、昨年の夏に、兄が胃がんに罹った。
話を聞くと、まだ転移をしていないという。
それで、今回は見舞いにも行かなかった。
そして、退院後の電話でも、「兄貴の場合は、全然心配していないから見舞いにも行かなかった」というその言葉で勇気づけられているようである。
兄は、私ががん関係のNPOの仕事をしていることを知っており、多少なりともがんを知っている私の言葉は信じられるようである。

以上、我が家の３人のがん患者の戦績は現在のところ２勝１敗であるが、こころの満足から言うと３戦全勝と思っている。
信頼できる良い先生にめぐり合い、自分で精一杯生きることができたなら、それで良しとすべきでは。
人は皆、いつかは冥土に旅立つのだから。

副理事長　井上　等

●事務局より一言

当会の事務局は南区仁保町にありますが、日常の事務連絡は、事務局長である私の自宅に設置したファクス付き電話で行っております。事務局の電話を携帯に転送していますので、がん患者さんからの相談にも24時間いつでも対応しています。

この会がスタートする時、「がんになったら直ぐに電話ください」という思いから、会のキャッチコピーを「がん110番」にしました。
がん患者さんが電話やインターネットなどで相談される場合は、悩みあげ

た末のことからです。それに〝即対応〟するのが、一番喜ばれることだと感じたからです。

まず、事務局に電話などで連絡が入ると、じっくり悩みや相談ごとを聞き、カルテに書いていきます。
電話をかけて来られた方に、いきなり相談したいことを話してもらうのは無理です。そんな場合には、私の方から元がん患者であることを話すようにしています。
そうすれば安心されるのか、心を開いて詳しく話をしてくださいます。

そして、聴取した内容をまとめて、当会の理事（医師など）や、がん患者の支援に協力している団体の責任者へメールで相談しています。
通常は、翌日には具体的なアドバイスが送られて来ますので、電話やファクスなどを使って回答していくという手順で相談に応じています。

今年４月からは、当会の設立後３年目に入ります。NPO 法人の認証を受けたのが一昨年 11 月ですから、本格的な活動を始めて１年余りです。
現在の会員は約 110 人ですが、会員数の伸びが少ないのが悩みです。
認証直後は一気に増えましたが、最近は微増状態です。
会員を増やすことが、この会の目的ではありませんが、会の運営は会費と寄付で賄われています。ですから、会の運営を安定的に行うためには、ある程度の会員数が必要です。

「入会するメリットは何ですか？」という質問を受けることがあります。
そんな時に「いつでも相談にのってもらえる〝安心感〟です」と応えるようにしています。
今や３人に１人はがんで死亡する時代です。
当会では、がんの勉強会「市民のためのがん講座」を２か月に１回開催し、３か月に１回「電話相談 がん 110 番」の開設、「セカンド・オピニオン」の普及活動やシンポジウムの開催などをして、がんのことをよく知り，治療方法やケアの詳しい知識や選択の仕方など、患者とその家族の皆様に、すぐに役立つ情報を提供しています。

私たちの会を、一人でも多くの皆さまに知っていただき、万が一、がんに罹った時にも慌てないように、そして、がんについて安心して相談に応じられる環境を創っていくことが、私たちの使命だと思っています。

今年も会員の皆様のご支援ご協力を得ながら、「入会していて良かった」言われるような会にしていくよう、スタッフ一同努力して参ります。どうぞ宜しくお願いします。

事務局長　高野亨

●広島県内のがん関係イベント情報

****

○NHK放送案内

日時：2006年1/7（土）21：00-23：00‥‥「救える命を救うために」
1/8（日）21：15-22：30‥‥「再発がん患者をどう支えるか」
番組：NHKスペシャル「日本のがん医療を問うⅡ」（２夜連続放送）
内容：広島県におけるホスピス活動も紹介される予定

○のぞみの会広島　冬の例会（講演会）

日時：2006年1月14日（土）14：30～16：30
場所：広島市中区地域福祉センター（TEL：082－249－3114）
参加費：のぞみの会会員は無料。一般500円。
演題：「がんとともに生きる」～数度の再発を乗り越えてがんと共に20年～
講師：荒金幸子（呉共済病院　在宅医療指導管理室長　師長）

○2006年のぞみの会尾道　冬の例会（講演会）

日時：2006年1月21日（土）14：00～16：00
場所：尾道市総合福祉センター（TEL：0848－22－8343）
参加費：のぞみの会会員は無料。一般500円。
演題：「がんとともに生きる」～数度の再発を乗り越えてがんと共に20年～
講師：荒金幸子（呉共済病院　在宅医療指導管理室長　師長）

○生と死を考えるセミナー　『よく生き　よく笑い　よき死と出会う』
日時：2006年1月22日（日）　午後1時開演～午後4時30分
場所：ふくやま芸術文化ホール・リーデンローズ　大ホール
主催：びんご・生と死を考える会
テーマ：「死への準備教育」
　第一部「いのちの尊さを考える　～『死への準備教育』とは～」
　　講　師：アルフォンス・デーケンさん
　　（上智大学名誉教授／びんご・生と死を考える会名誉会長）
　第二部「大人と子どもが実感できる『いのちの尊さと大切さとは』」
　　講　師：高木慶子（たかき　よしこ）さん
会費：前売り1,000円。当日1,300円。
　チケット専用電話：090－1330－7998
　チケット用FAX：084－923－1466（ちょう外科医院）

○第５回「市民のためのがん講座」
日時：2006年1月28日（土）午後3時から午後5時まで
場所：広島市中区地域福祉センター
テーマ：①がんの痛みと対策（県立広島病院麻酔集中治療科　藤本真弓先生）
　　②転移がんの基礎知識（元順天堂大学医学部　廣川　裕先生）
連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610　E-mail：info@gan110.rgn.jp）
参加費：会員 800円　協力団体会員 1,100円　一般 1,300円

○設立１周年記念シンポジウム「がん治療の経済学」
　～～いくらかかるの？　いくらもらえるの？～
日時：2006年2月11日（土・祝）午前1時30分から午後4時（開場：午後1時）
場所：広島市中区地域福祉センター
内容：現在、すぐに役立つ魅力あるものを企画中
連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610　E-mail：info@gan110.rgn.jp）

　※企画運営スタッフ募集中！
　　記念シンポジウムの企画・運営に参加いただくスタッフを募集します。
　　経験は不問です。当会事務局までご連絡ください。

○おかげさまで「広島・ホスピケアをすすめる会」10 周年記念会

日時：2006 年 2 月 26 日（日）
場所：広島 YMCA（広島市中区八丁堀７－１１）
主催：広島・ホスピスケアをすすめる会
　第１部　講演会 13:20～16:00　国際文化ホール（本館地下１階）
　　会費：500 円
　　講演　”ユーモアと医療”（伊丹仁朗氏）
　　講演　”患者とユーモアとハグで友達に”（岡原仁志氏）
　　落語　”病院日記”（樋口　強氏）
　第２部　親睦会１6:30～18:00 コンベンションホール（YMCA2 号館地下）
　　会費：1,000 円
参加申込み：郵便振替にて参加費を振込んでください。
　　郵便局加入者名：広島ホスピスケアをすすめる会
　　口座番号：０１３３０－４－７０５３８
定員：285 名（定員になり次第締切）
申込み期限：2 月 15 日（水）
　　払込取扱票通信欄に、チケット枚数（第１部・第２部の別），
　　チケットのお届け先の住所、連絡先電話番号を必ず明記。
　　＊ご入金確認後、チケット送付。
担当者連絡先：090-5260-1011(栗山)

○がん電話相談「がん１１０番」

日時：2006年3月5日（日）午前10時から午後2時まで
電話（携帯）：090-6419-4535　090-6432-7424
連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610　E-mail：info@gan110.rgn.jp）

●編集後記

****

ニュースレター第12号はいかがでしたでしょうか。

今回は、初めての試みとして、年末12月号と新年号の合併号としました。新年の引き締まった雰囲気が出せたのではないかなと思います。

毎回お願いしておりますが、当会の運営をより良くするため、会員の皆様からのご意見、ご質問等を募集しております。是非、担当者までお寄せください。

次回は，シンポジウム直前号として詳細な内容をご案内する予定です。ご期待下さい。

今年も引き続き、編集子へのご支援とご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

（浩）

■発行者： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局
URL： http://www.gan110.rgn.jp
■連絡先： E-mail： info@gan110.rgn.jp TEL&FAX：082－289－0610
■Copyright： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま